

外来看護の構築

○船木泰代、丹野千恵子、岡本真実

稲波脊椎・関節病院

【はじめに】当院は脊椎とスポーツ整形に特化した病院として7月にオープンした。

外来の特性は全国から患者が来院し、約1割の患者が手術の対象である。

初診時には、診察前に必要な諸検査、そして手術が決定した場合は術前検査と入院に関わる説明・指導などを最小来院日数で済むような段取りで、患者、家族への負担を最小限に考え対応している。そのため医師だけでなく、事務はじめコメディカルを含めたチーム医療は必須である。

私達が考える外来看護は、患者が安心して諸検査、診断、治療が受けられるよう説明・指導に加えコーディネートすることである。

外来看護師は現在9名で内6名が新人であるが、患者が「この病院を選んで良かった」と思って頂ける看護を提供したいと考えている。そのためには看護師一人一人が術前術後の経過を共通理解することが大切である。

その教育の1つとして院内他部署研修を企画し実施した。その結果について報告する。

【方法】

- ① 研修期間 平成27年10月～11月
(半日～2.5日)
- ② 対象者 外来看護師8名
- ③ 研修後アンケート実施

【結果・考察】研修することで入院から退院までの流れが理解でき、研修前に比べ患者説明や関わりなどの不安が減少した。また他部署、他職種と交流することでチーム医療においてコミュニケーションと情報共有の大切さが実感できた。ただ病棟の研修日数は不十分であった。

【まとめ】外来看護は基礎知識だけでなく、患者個々に合わせた説明と対応できる応用力が必要であり他部署研修は有効であった。またチーム医療を考える上でも有用であった。